

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書

プログラム名	理論と実践の往還を実現する研修体制の構築 ～ミドルリーダー育成と教職を志す大学院生の現場理解を同時に実現する対話的研修プログラムの開発～
プログラムの特徴	<p>現職教員にとって、後輩の育成は学校教育の質の向上のためにとっても大切なことである。しかし、近年、学校を構成する教員の年齢構成が偏りをみせ、育成すべき若手教員がないという学校も珍しくない。教員は後輩を育成することにより本人の職能をスキルアップしていくという面もある。</p> <p>上越教育大学教職大学院の学生（以下「教職大学院生」という。）のうち、特にこれから教員を志そうという学卒院生にとっては、学校現場で働いている現職教員から、教育現場の生の課題を教えてもらい、それに対する対処法の指導を受けるということは、とても貴重な機会であり、現在行っている学修や研究が、教育現場で役に立つのかどうか直接意見をもらえる良い機会でもある。一方で、近年、現職派遣院生が減少傾向にあり、本学教職大学院でも、現職院生と学卒院生が対話的に学ぶ機会が以前に比して減っている現状がある。</p> <p>本プログラムでは、教職大学院生が公的機関で行われる研修講座に参加したり、現職教員から教員研修として本学教職大学院で開催する研修講座や授業等に参加してもらい、グループワークや検討会など、教職大学院生と現職教員との対話的研修を行う。教職大学院生は、学校現場実践の経験に基づいた見方や、大学院での研究の理論に基づいた見方から、仕事へ取り組む姿勢、様々な現場の課題への対処の仕方などを学ぶこと、また、現職教員は若手との接し方を学んだり、教職大学院生に教えることで、具体的な学校現場での若手教員への指導方法などを考えることをねらいとしている。</p> <p>講座の内容、グループワークの様子は、ビデオカメラで記録し、講座終了後にインターネット上で閲覧できるようにし、参加者が自分たちの活動の仕方、グループワークの流れや、全体の講座内容などをすぐに振り返ることができるようにする。そして、研修講座に参加した現職教員、教職大学院生それぞれの立場からの振り返りの情報をインターネット上の特設サイト等で共有することで、それぞれの視点からの見方を共有し、今後の教育活動に活かすことができるということが、本プログラムの特徴である。</p>

令和3年3月

機関名 国立大学法人上越教育大学

連携先 長野県教育委員会

プログラムの全体概要

※各教育委員会等の研修実施の参考例となると思われる開発成果を中心に、プログラムの全体概要をポンチ絵等でまとめてください。



1 開発の目的・方法・組織

① 開発の目的

平成 26 年から、本学教職大学院と長野県教育委員会は連携・協力し、長野県総合教育センターを会場として教員研修講座を企画・運営してきた。研修テーマは、長野県教育委員会が、長野県の教育課題から設定し、本学教職大学院が、教育課題に即した内容で、理論と実践の往還を受講者に体験させることができる講師を選定してきた。両機関が連携し、長野県下の教員の資質向上を目指し、教職大学院における学びの具体化を図りながら研修を実施しているのが特徴である。これまで、長野県教育委員会と連携を図り平成 28 年度から 4 年間、教職員支援機構の研修プログラム開発事業の採択を受け、研修事業を共同で行い、検討会を重ねることで、本学教職大学院と長野県教育委員会が抱える課題を共有することができるようになった。これまでの研修講座の受講者からの評価が高かったため、令和 2 年度では、今までの 5 講座から 6 講座に講座数が増えることとなった。

長野県教育委員会の抱える問題点としては、次の 2 点が挙げられる。

1. 昨今の学校現場の年齢構成の偏りにより、後輩の指導の機会が減っていることから、ミドルリーダー育成の機会が少ない。
2. 昨今の ICT 教育や道徳の教科化などの新たに導入された取り組みへのスキルアップの機会が少ない。

これらの課題に応えることを目的に、講座内容を長野県教育委員会と協議の上決定する。また、本学教職大学院においては、近年、各県に教職大学院が設立されたため、本学への現職派遣数が少なくなり、学卒院生が現職院生から日常的に学ぶ機会が従前に比べ減っていることが課題となっている。このことから、学卒院生が現場の教員から学ぶ機会を増やす取り組みが必要である。現職教員の研修講座に教職大学院生を一緒に参加させ、互いにワークショップや討議などを行い、現職教員は、若手の考えを聞き、接し方などを学ぶ。そして、学卒院生は教育現場でのふるまい方、子どもへの接し方などを学び、学校現場を理解し、教員を目指す気持ちを固めていくことを通して、相互理解を深める研修プログラムを開発することを目的としている。

② 開発の方法

3 つの研修方法を実施し、それぞれについてアンケート調査により検証する。

1) 対話的研修講座

長野県の教育的課題をもとに長野県教育委員会が設定した講座内容に対応できる講師を本学教職大学院が選定し、理論と実践の融合を目的とした対話的研修講座を全 6 日の日程で開催する。そこに長野県現職教員の受講者と教職大学院生が参加し、講座内でのグループワークや講座後のリフレクションで協働的に課題を解決するなどの対話的な活動を行い、学びを深める。

また、リフレクションでは、講座内容について理解を深めるとともに、グループワーク等での対話の仕方についても振り返ることで、現職教員、教職大学院生の相互理解を図る。

2) 事後のフィードバック（講座ビデオによる研修）

上記「対話的研修講座」の内容をビデオ撮影し、公開可能なほぼ全ての内容を動画配信サイトにアップロードすることにより、講座受講者が研修後に研修内容を復習したり、同僚等に研修内容を伝える時に閲覧したりできるようにし、研修内容の定着を図る。

3) 出張拡散研修

長野県総合教育センター以外で行われる私的、公的教育研修会や学校校内研修会、学会等に本学教員と教職大学院生が参加し、対話的研修講座で学んだ知見をもとに、研修会に参加している現職教員と対話的研修を行い、各地の現職教員にもこの研修方法を拡散し、研修会参加教職大学院生の更なる意識の向上を図っていくこととする。

③ 開発組織

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
1	長野県総合教育センター・所長	飯島 由美	教職大学院との連携担当 (協議会副議長)	教育実践高度化専攻 教科教育・学級経営実践コース長
2	同・指導主事	田中 聡	教職大学院との連携担当	
3	上越教育大学大学院学校教育研究科・教授	西川 純	開発プログラムの総括担当 (協議会議長)	
4	同・教授	片桐 史裕	研修講座の企画・運営・連携担当	
5	同・教授	桐生 徹	出張拡散研修の運営担当	
6	同・教授	水落 芳明	同上	
7	同・教授	阿部 隆幸	対話的研修講座Ⅱ運営担当	
8	同・准教授	大島 崇行	事後フィードバック運営担当	
9	同・准教授	榊原 範久	同上	
10	同・教授	赤坂 真二	対話的研修講座Ⅰ運営担当	
11	同・教授	岩崎 浩	同上	
12	同・准教授	岡田 広示	同上	
13	同・教授	佐藤 多佳子	同上	
14	同・准教授	関原 真紀	同上	
15	同・教授	早川 裕隆	同上	
16	同・教授	松井 千鶴子	同上	
17	同・教授	松沢 要一	同上	

2 開発の実際とその成果

①対話的研修講座

○研修の背景やねらい

長野県の教育的課題をもとに長野県教育委員会が設定した講座内容に対応できる講師を本学教職大学院が選定し、理論を中心とした講座を全6日の日程で開催する。長野県教育委員会の抱える喫緊の課題として、昨今の学校現場の年齢構成の偏りから、後輩の指導の機会が減っており、ミドルリーダー育成の手法開発が挙げられる。また、本学教職大学院においては、近年、各県に教職大学院が設立されたため、本学への現職派遣数が少なくなり、学卒院生が現職院生から日常的に学ぶ機会が従前に比べ減っていることが課題となっている。このことから、学卒院生が現場の教員から学ぶ機会を増やす取り組みが必要である。そこで長野県現職教員の受講者と教職大学院生がこの対話的研修講座に参加し、講座内でのグループワークや講座後のリフレクションで協働的に課題を解決するなどの対話的な活動を行い、学びを深める。

また、リフレクションでは、講座内容について理解を深めるとともに、グループワーク等での対話の仕方についても振り返ることで、相互理解を図る。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

予定では教職大学院生が長野県総合教育センターまで赴いて現職教員の受講生と一緒に研修を受講するはずだったが、新型コロナウイルス感染症蔓延で他県との往來が制限され、実際に長野県総合教育センターでの研修に参加できた教職大学院生は2名に留まってしまった。

また、6月25日(木)に予定していた講座を10月20日(火)に順延したり、2回の講座をオンラインで行ったりするなど、新型コロナウイルス感染症対策として当初の予定から変更しなければならないことが目白押しであった。

研修項目	対象	参加人数	期間	会場	日程	講師等
1 特別支援教育に関する講座	小・中・高・特等の教員	31 (2)	7月13日 (月)	長野県総合教育センター	10:10～12:10	西川純
					13:10～15:10	関原真紀
					15:20～16:50	フィードバック
2 指導力を上げる学級経営のポイント (オンライン講座)		30	8月28日 (金)		10:10～12:10	岡田広示
					13:10～15:10	赤坂真二
					15:20～16:50	フィードバック
3 ICT初歩の初歩講座 (オンライン講座)	32	9月7日 (月)	10:10～12:10	榊原範久		
			13:10～15:10	水落芳明		
			15:20～16:50	フィードバック		
4 道徳教育に関する講座	29	9月18日 (金)	10:10～12:10	早川裕隆		
			13:10～15:10	小宮健		
			15:20～16:50	フィードバック		
5 主体的・対話的で深い学びの授業づくり	30	9月24日 (木)	10:10～12:10	片桐史裕		
			13:10～15:10	岩崎浩		
			15:20～16:50	フィードバック		
6 ゼロからのプログラミング教育	23	10月20日 (火)	10:10～12:10	大島崇行		
			13:10～15:10	桐生徹		
			15:20～16:50	フィードバック		
全参加者数		175 (2)	※参加人数の()内は参加大学院生			

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

研修項目は、長野県教育委員会が、前年度において県下の教職員の研修要望や喫緊の課題を洗い出したものである。教育現場で今後必要とされている「プログラミング教育」、「ICT導入の入門講座」を昨年度から継続して行い、受講生のニーズに応えるようにした。また、「特別支援教育に関する講座」を新設した。

すべての講座に共通して、研修内容について協働的な演習や、模擬授業への参加という形で、講義の内容を実践的に確認できる構成をとり、受講者の講座内容の振り返りに関しても質疑応答やアンケート記載の時間を十分に確保し、「学びの質を高める」研修講座となるように配置した。

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
1 特別支援教育に関する講座	2	特別支援学級・学校卒業後、大人になった方の保護者、雇い主に聞いた話を元に、本当に必要な特別支援のあり方を考えることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：子どもの将来を考え、有効な特別支援教育のあり方の情報を提示し、話し合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	通常の学級や通級指導教室における発達障害等の教育的ニーズのある児童生徒への適切な指導・支援を考えることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：教育的ニーズのある児童生徒について情報を提示し、理解するとともに、適切な指導・支援について話し合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
2 指導力を上げる学級経営のポイント	2	学級経営がうまく行われているかどうかを評価する方法を身に付けることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：実際に行われている評価方法を知り、実際に学校に持ち帰って評価するにはどのような工夫が必要か、現時点での疑問点等を共有した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	子どもが集団として過ごすためには、教科経営と学級経営が必要であるということを理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：学校現場の子どもの実態や学級経営等の事例を知り、実際に各自の学校に当てはめて学級経営するにはどのような工夫が必要か、現時点での疑問点等を共有した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
3 ICT初歩の初歩講座	2	ICT機器の導入が進む学校現場であって、ICT機器導入方法がわからない教員が、同じ歩調で研修を受けられることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：ICT機器の教室環境整備や、少しの活用で授業効率化できることと、子どもの学習の活性化の方法を提案し、受講者はそれらを実際に体験した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	ICT活用の際に、具体的に何をどのように教室環境で使用したら良いのかを知り、実際に授業で活用する意欲を持つことをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：iPadを受講者が実際に使用し、簡単にできる活用方法を体験し、工夫点、応用点などを互いに共有した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし

4 道徳教育に関する講座	2	授業を実践するにあたっての、不安や疑問に答えながら、効果的な授業実践を可能とする授業力の向上を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：道徳科はこれまでの道徳の時間と何が同じで何が違うのか。道徳科の目標を基にしながら、その違いや、道徳科で目指すべきものについて理解を深め合った。 ・実施形態：講義 ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	効果的な発問、補助発問、道徳的諸価値の理解や生き方に関して児童・生徒に理解してもらおう方策を身に付けることを目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：模擬授業を体験することにより、実際に学校に持ち帰って実施するにはどのような工夫が必要か、現時点での疑問点等を共有し、解決に向けて話し合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
5 主体的・対話的で深い学びに関する講座	2	「対話的学び」と「深い学び」が密接に繋がっており、課題により、学びの様相が全く変わってくるということを理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：国語教材の着目点の違いによる学習者の学びの違いを示し、実際に課題を解くことにより、学習者の思考を追体験し、課題づくりのポイントについて理解を深め合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	主体的・対話的で深い学びが起こる授業をデザインするためには、的確な「問い」が重要であるということを理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：算数・数学の「問い」の作り方による子どもたちの学びの姿の違い、気づきの違いなどを示し、問題を解いたり、問いを作ったりしながら理解を深め合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
6 ゼロからのプログラミング教育	2	令和2年度から小学校で導入されるプログラミング教育の目的を理解し、そのためにどのような教材開発、指導方法を取り入れるべきなのか、受講者相互に考え、授業を作っていくアイデアを得ることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：学校で簡単に導入できるプログラミング教育の事例を体験し、実際に学校に持ち帰って実施するにはどのような工夫が必要かを話し合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	プログラミング教育の基礎的な考え方を学び、実際にプログラミングを行い、体験することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：実際にドローン飛行のプログラムを試行錯誤しながら受講者で考える。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし

※別紙実施要項、テキストを添付

○研修の評価方法、評価結果

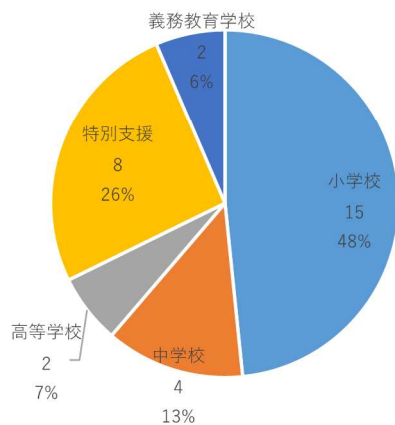
各講座終了後に長野県教育委員会が実施したアンケート結果を次頁から示す。

第1回 7月13日(月)

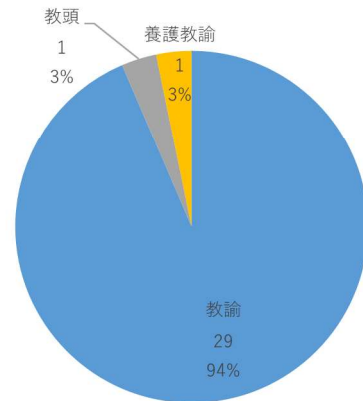
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
3-8-01-02 特別支援教育に関する講座 ～小・中学校、高等学校における特別支援教育～		7月13日(月) 会場 総合教育センター	午前講義 「特別支援学級の子どものためのキャリア教育入門」 特別支援学級・学校卒業後、30～40歳になった方の保護者、雇い主に聞いた「学校で何を学んで欲しかったか」をお話します。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 西川 純 午後講義 「教育的ニーズのある児童生徒の理解と対応」 通常の学級や通級指導教室における発達障害等の教育的ニーズのある児童生徒への指導・支援を考えます。 講師 上越教育大学教職大学院 准教授 関原 真紀
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	「教育のプロ」としての高度な知識や技能	
	学習指導	生徒指導	新たな教育課題
	⑧	⑩ ⑪	⑬
基礎形成	伸長	充実	次世代育成
		希望	一 小 中 高 特 一
		○	20名
			義初 高初 義中Ⅱ 高中Ⅱ
			○
			・持ち物 なし

午前講師：西川 純 教授 午後講師：関原 真紀 准教授

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「特別支援学級の子どものためのキャリア教育」 西川 純 教授

- ・ 支援学級だからこそできる通常級の子ども達と学び合うための支援や方法を考えていきたいなと感じました。
- ・ 「中学時代までに多様で多数の知人、つながりを作る」というのは新たな視点でした。
- ・ 普段あまり考えてこなかった視点で考える機会をいただき、勉強になりました。
- ・ 生徒の不得意を必死になって伸ばそうとするのではなく、得意なことをさらに伸ばす指導をする、ということが大切だと感じました。
- ・ 「色々な人の指示を聞けること」の大切さは教科担任制の中学校で身に着けられるうってつけのチャンスであり、これを逃さない3年間にしたい。
- ・ 学校が核・拠点となり、個々の児童・生徒の将来を見据えて、キャリア教育を親と共に歩いていく必要性を強く感じました。
- ・ 支援学級の子たちと原学級の子たちの結びつきが将来の子どもたちに大きな意味があることが分かったので、原級の担任との連絡を密にして少しずつつながりをもっていきたい。
- ・ 普段の何気ない会話の中で先生方に『学び合い』の視点、考え方を伝えていきたい。
- ・ 学習への困難さを感じている生徒がどのようなアプローチをしたら学びやすくなるのかよく見届けをしたい。
- ・ これからの社会で幸せに生き抜いていける力を身に付けさせたい。そしてそのことについて同僚と話し合いたいと思います。
- ・ 支援学級の保護者にどのように働きかけるか難しさも感じました。
- ・ 「多数で多様な知人を、学校時代に作る」ために、「自分の苦手を助けてくれる友とつながりをつくる」ために、交流し協働学習を改めて見つめ直したいと思いました。
- ・ 事業所で求められることと、今の子どもたちに不足していること、保護者の方との相違、多々課題があると痛感します。
- ・ 特別な支援が必要な子どもたちに必要な力、「主体性と協働性」は、すべての子どもに必要だと思うので、しっかりとその意義を子どもたちに語れるようにしたい。

受講者の感想

講義「特別支援学級の子どものためのキャリア教育」 関原 真紀 准教授

- ・ 通常学級の中で困り感のある子ども達への支援について、疑似体験等を通してとてもわかりやすく学ぶことができました。
- ・ 発達障害の具体的な特性や、それによって起こる環境などのミスマッチをわかりやすく教えていただき、冰山モデルで指導方法や支援内容等を見出していくことで、子どもの姿や現段階で身に着けるべきこと、必要なことが見えてくるのだと感じました。
- ・ 授業のUD化の話が具体的でわかりやすかったです。冰山モデルの支援シートは、短い時間でも事例を整理するのにとても役立つと思いました。
- ・ 「実行機能の障害」の弱さに大納得でした。図書館で本を選べずにいる子について理解が深まった気がしました。「聞く」を充実させるテクニックをいくつも教えていただきありがとうございました。
- ・ LDのような困難さをもつ児童がいるので、特に音韻意識のあそびや、漢字のまちがいによる苦手さの抽出と、指導方法をやってみたいと思います。
- ・ 「冰山モデル」で考える支援シートが書きやすかったです。原学級の担任の先生と共有しやすそうなシートだと思いました。
- ・ 個別への支援や配慮について、障がいの特性について教えていただきながら学べたのはとても良い機会でした。体験しながら子どもの気持ちについて理解することができてよかったです。
- ・ LD傾向の生徒を初めて受け持ち、漢字ノートを見てびっくりした今年度のスタートだったので、LDのための支援を学ぶことができてよかったです。
- ・ UD化のポイントをわかりやすく教えていただきました。また、支援の工夫もいろいろと挙げてくださり、時間があればもっとたくさんお聞きしたかったです。
- ・ 子どもの特性を理解する力をつけていくことが必要だと感じました。
- ・ 見えているものの下に見えない背景となる要因があり、それを理解して支援していくことについて具体的に聞くことができ、明日からの実践に活かしていきたいと感じた。
- ・ 「教師が最大の人的環境」という所で、自分の取り組みに活かせるヒントがいっぱいありました。
- ・ UD化に対して、授業を簡易にするのであろうと考えていましたが、授業の質を落とすことではないということは、新たな認識となりました。
- ・ 特別な支援が必要な子ども・生徒の実態を例や現場の方々のお話を聞きながら考えることができ、自分の校種の枠から超えることができたと思います。特別支援教育の最先端のお話も聞くことができたのでためになりました。



講座のねらいの達成度

午前講義では、卒業した生徒の保護者に実施した「学校にどんな能力を身につけてもらいたかったか」という調査結果をもとに、児童生徒が幸せになるために学校の役割はどうあるべきか御講義いただいた。

午後講義では、ADHD、自閉症スペクトラム、LDの児童生徒への指導について、目に見えている部分の指導では不十分であり、見えていない背景となる要因を支援することの必要性について御講義いただいた。

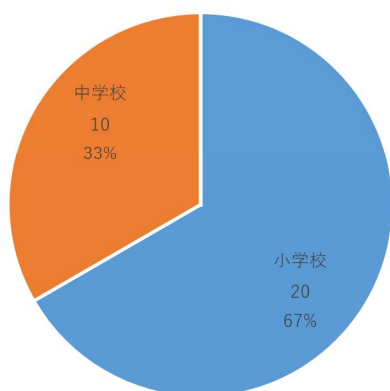
一日を通して、特別な配慮を要する子どもへの具体的な指導や支援を考える上で、子どもの将来にとってどのような学びが必要なのか、保護者、児童生徒との関わり方等、明日からの学校生活に生かせる内容であり、講座のねらいを十分達成できたと考える。

第2回 8月28日(金)

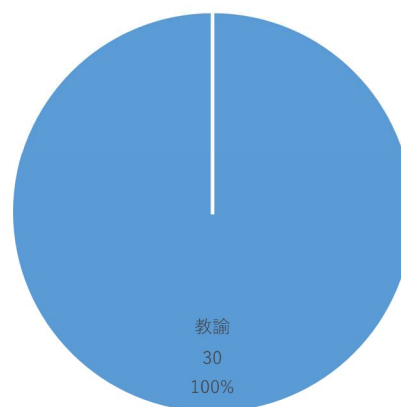
講座番号・講座名		実施日		ねらい、連絡等	
3-8-01-03 指導力を上げる学級経営のポイント ～効果的な集団づくり～		8月28日(金) 会場 総合教育センター		午前講義 「学級経営の評価」 学級経営における評価基準の作成から、学級経営の課題と傾向を把握し、今後予想される課題の予防と解決方法を考えていきます。 講師 上越教育大学教職大学院 准教授 岡田 広示 午後講義 「指導力の高い教師の知識と技術」 効果的な指導をしている教師たちは、どのような考えのもとにどのようなことをしているのか。研究や実践をもとに考えます。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 赤坂 真二	
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	「教育のプロ」としての高度な知識や技能			
		学習指導	生徒指導	新たな教育課題	
		⑧	⑩ ⑪		
基礎形成	伸長	充実	次世代育成	希望	一 小 中 高 特 一
				○	20名
				義初	高初
				義キⅡ	高キⅡ
					○
				講師 上越教育大学教職大学院 教授 赤坂 真二	
				・持ち物 なし	

前半講師：岡田 広示 准教授 後半講師：赤坂 真二 教授

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「学級経営の評価」 岡田 広示 准教授

- ・自分の核となるものを見つめ直し、そのためにどうしていくことが必要か再認識できた。
- ・Q-Uの結果のとらえ方やいじめについて考える場面など、私自身の指導がどうであるか考え、振り返ることの必要性を感じた。
- ・ルーブリックづくりにおいて、理想の学級を表す言葉は出てきたのですが、どのような姿が見えていけばいいのか、と問われた時に、自分の頭にあまりビジョンがなかったことに気づきました。明確な目標、ビジョンをもって教育活動をする大切さが実感できました。
- ・Q-Uを活用できるように詳しく教えてくださったり、ルーブリック評価を教えてくださいました。とても勉強になった。
- ・「評価は常に流れている」勉強になりました。
- ・頭のなかでは分かっているけど自分の価値観で子どもを見てしまうところがあるので、“ゼロベース”を意識し子どもをみとっていきたいと思った。
- ・観察眼と鑑識眼をきたえたい。
- ・Q-Uのプロット予想は、教師の普段の生徒理解の確認のために非常に有効であると感じた。
- ・ルーブリックを初めて作成したので参考になった。
- ・明確な目標、ビジョンをもって教育活動をする大切さが実感できた。
- ・評価は自分の指導が適切かどうかということに大きく関わってくることを学べた。
- ・学級の評価をするためには、生徒一人一人の様子をしっかりと見て、エピソードが語れるようにならなくてはならないことが改めて分かった。
- ・Q-Uの回答の背景を読む大切さを学べたので、指揮して取り組みたい。
- ・実践的な内容も含まれていて、すぐに自分の指導を見返せるお話でした。
- ・色メガネではなく、生徒そのものをみることの重要性を改めて感じました。
- ・子どもを「みる眼」をしっかりと鍛えていきたいと持った。普段見逃していることがものすごくたくさんあるような気がした。

受講者の感想

講義「指導力の高い教師の知識・技術」 赤坂 真二 教授

- ・学級経営に対する考え方が深まり、今後の意欲がとて高まりました。
- ・今までの自分の経営を客観的に見直すことができた。教師の役割、ルールの大切さとその必要性を子どもたちに語ることも大切にしていきたいと学んだ。
- ・「学級経営を学ぶ」ということはとても重要なことであると感じた。学級機能のポイントチェックをしていると、自分が意識できていなかったことがとても多かった。
- ・集団育成の底面にあるものは、心理的安全性であるということを知った。
- ・教師の力で学級がつくられていくことに怖さも感じるが、わくわくも感じてくる。子どもたちと共に学ぶ、学ばせてもらうという気持ちは大切にしていきたい。
- ・教師の役割や育成の方向性が具体的に見えてきた。
- ・自分のクラスの子どもたちの姿をイメージしながら話を聞くことができた。
- ・”千手観音”として笑顔で日々指導する教師でありたいと思った。
- ・先生がされる一つ一つの投げかけに対して、「自分はできているか」ということを常に自問自答しながら講義を受けることができた。経験則だけではなく技術として、どのように学級経営を行うかを知ることができ、自分が受け持っているクラスについてもう一度評価してみて、これからどうしていくべきかを考えていきたい。
- ・今までの自分の実践を振り返る90分となった。「居心地のよいクラス」を目指しているながら自分はきちんと生徒に向き合っているか考えてしまった。
- ・今いる学校は管理的になってしまう部分があると思った。
- ・T-C、C-C関係を保つことがとても大切だと思った。
- ・生徒が思うような評価をつけられないのは、Tの指導法とズレているという点を見落としがちになるので心がけたい。
- ・効果的な学級経営にするために20のチェックリストがとても有効で、まだまだできることがあると感じました。
- ・どの子と話したのか名簿にチェックを入れて、一人一人とつながるチャンネルをもち、リレーションを形成したい。



講座のねらいの達成度

午前にお二人の講師による講義、午後は専門主事による演習として一日実施した。

午前、前半に岡田准教授より、目標と評価の関係、観察眼、鑑識眼を鍛えることの重要性、Q-Uをどのように扱うべきか御講義いただいた後、理想の学級づくりのためのルーブリック表作成に係る内容について御講義いただいた。後半は赤坂教授より、先生と生徒、生徒と生徒のリレーションの確立が重要である、いわゆる「織物モデル」の仕組みについて御教示いただいた後、一人一人の子どもが安心して学校生活を送ることができるための教師の役割について御講義いただいた。

午後は、演習を通して講義内容の整理ができ、さらには色んな先生との情報共有やアドバイスを聞く時間を十分とることができたため、受講者の表情から見て有意義な研修につながったと判断できる。

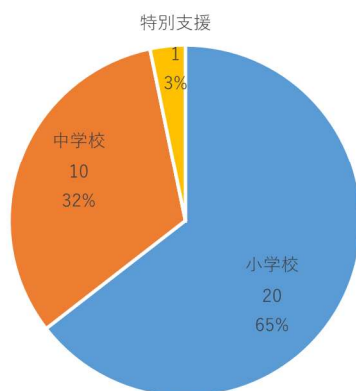
急遽、Zoomによる講義を午前中に行い、午後は専門主事による演習としたが、ふりかえりの記載内容からも十分な成果が得られたと見受けられる記述が多いことから、ねらいは十分達成できたと考える。

第3回 9月7日(月)

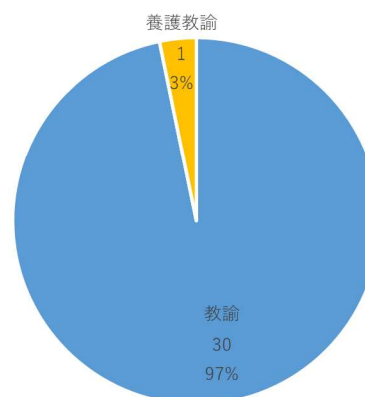
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
現代 3-8-01-04 ICT教育の初歩の初歩講座 ～授業でのICT活用の基礎と実践～		9月7日(月) 会場 総合教育センター	午前講義 「明日から使える簡単ICT活用術」 ICTが苦手な人のための講座です。基本的なICTの役割を知り、授業場面での簡単な使い方を機器に触れながら体験します。 講師 上越教育大学教職大学院 准教授 榊原 範久 午後講義 「初めての先生向きiPadの活用」 iPadを授業で使ってみませんか？新しい知識は必要ありません。やる気だけ持ってきてください。初めての方のための講座です。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 水落 芳明 ・持ち物 なし (iPad等のICT機器は大学側で用意します)
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	「教育のプロ」としての高度な知識や技能	
		学習指導 生徒指導 新たな教育課題	
		⑦ ⑧ ⑩	
基礎形成	伸長 充実 次世代育成	希望 一 小 中 高 特 一	職初 高初 義キⅡ 高キⅡ
		○	○
		35名	

前半講師：榊原 範久 准教授 後半講師：水落 芳明 教授

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「明日から使える簡単ICT活用術」 榊原 範久 准教授

- ・ ICT機器の名前を確認できたことがよかったです。学校には機器がそろっていますがうまく活用ができないことが分かったので、積極的に使っていきたいと思いました。
- ・ ICT機器に苦手意識があり、なかなか活用できていないことが子どもたちの将来にかかわってくることを改めて感じました。
- ・ 教師のICTへの苦手意識や経験不足、ICTの不使用は、子どもたちの将来に大きなリスクを生むことになる、この言葉が印象的でした。
- ・ ICTの活用について不安があったのですが、ペアとの話を通してみんな同じように思っていることを共有でき安心しました。
- ・ 日本の遅れが思っていたよりもひどいこと、ICTを学ばないことで起きる未来のリスクを知り、苦手感を克服して積極的に取り組んでいきたいと思いました。
- ・ 教師が活用しなければ子どもたちも活用する機会がないので、思い切って使ってみようと思います。ただ、不具合が出たときなど対応できないことにやっぱり不安があります。もっと勉強していきたいと思っています。
- ・ ICTが無くても授業はできるが、子どもたちの将来に大きなリスクを抱える可能性があることに教師の責任を感じた。できることから積極的に活用していきたいと感じた。
- ・ 「使えない」ことは、自分が思っている以上に大変なことなんだと危機感を感じた。まずは名前を覚え、効果的な使い方をいち早く考えていきたい。あわせて、使い方、使うモラルやマナーについてもしっかり伝えられるようになりたいと思った。
- ・ まずは教師である私たちがうまく活用するモデルになれたらいいなと思いました。
- ・ 苦手だけど苦手を言い訳にはいけないと改めて感じました。
- ・ 「自分が苦手」ということで子どもの可能性をつぶしてはいけないと本気で思えました。ICT機器の名前も小さなことですが、今日1つ1つ教えていただき少し自信になりました。出来る、出来ないではなくて、まずはやってみよう！！と意欲が持った講義でした。
- ・ これまでどうしてもデメリットの方が先行してしまうイメージが強くて、また設備のそろっていない学校の責任にしている部分が強かったが、私がかためらうことで生徒たちのためにもならないことに気づいた。

受講者の感想

講義「初めての先生向きiPad活用術」 水落 芳明 教授

- iPadの簡単な機能を使って行える活動をいくつか教えていただけて参考になりました。
- iPadの写真機能を使うことであんなに多くのやりとりや楽しい活動ができるのだなと知ることができました。
- カメラを使った授業を実践できたらと思いました。観察の記録などに活用できたらと思います。
- 写真に文字を書き込むというものは知らなかったので使える内容の幅が一つ広がりました。やはり、まずいろいろ知らないと、活用のアイデアが浮かばないと感じました。
- 写真を撮るだけでこんなに色々な面白さが見つかるとは思いませんでした。これなら私にもすぐに取り入れられると思います。
- 10年後には2/3が今の地球上にない職業になっているだろうというお話を聞き、教師としての責任の重さを感じました。
- 子どもたちに確かな力をつけられるように、ICTも含め私自身が努力しなければと感じました。
- まずは気にせず「やってみる」「使ってみる」ことが大切だと思いました。
- 写真しりとり、楽しかったです。こういう使い方もあるんだなと勉強になりました。
- 活用するといわれるともっと難しい使い方というイメージでしたが、もっと気楽に使えるということに安心しました。
- カメラを使い、撮った写真を編集するという簡単な操作でしたが、これで観察記録が楽しくできると感じました。手書きにこだわらず、タブレットなどを活用して、子どもの興味・関心や主体性につなげていきたい。
- iPadの写真機能と書く機能を使っての授業アイデアを教えていただき、学級に帰って活用したいと思った。
- 2人1組で協力して取り組む中で自然とスキルが身につく、良い方法だと思いました。さっそくやってみたくです。
- 一度覚えてしまうととても簡単で楽しかったので、教室のiPadを使ってみたくになりました。
- ICTを気軽に使うには、まずは教材や内容にこだわらず、簡単に試してみることから始めるのもよいと感じました。



講座のねらいの達成度

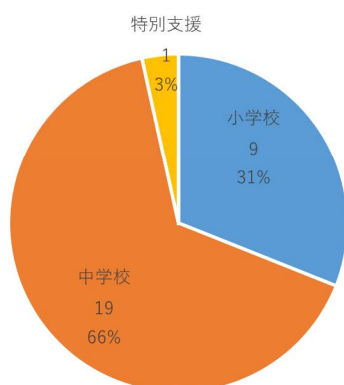
午前にお二人の講師による講義、午後は専門主事による演習として一日実施した。前半は榎原准教授より、長野県教員のICT教育に対する態度が全国的に低いことを指摘され、教員のICTへの苦手意識、経験不足によるICTの不使用は子どもの将来に対して大きなリスクをかかえるとされ、ICT教育の必要性について御講義いただいた。また、ICT教育の初歩的な知識理解として、ICT機器の名称、使用例等丁寧に御説明いただいた。後半は水落教授より、iPadの基本操作、カメラ機能と写真の加工について御講義いただいた。その後、2人1組でiPadを使用した「写真しりとり」を体験し、写真撮影から画像編集の方法について御講義いただいた。iPadを全く使用したことが無い受講者は、基本操作、写真撮影、画像編集等にもすぐに慣れ、次第にデザイン等工夫しながら画像編集する様子が見られた。午後の演習では、ICT機器の使用経験のある先生方のアイデアをグループ内で共有し、機器の使い方へのヒントを得る機会となった。「初歩の初歩」の教員向け講座という観点では、ICT教育に対する意識改革と、初心者でも安心して明日に生かせる手ごころな使い方を学ぶことができたことから、講座のねらいは達成できたと考える。

第4回 9月18日(金)

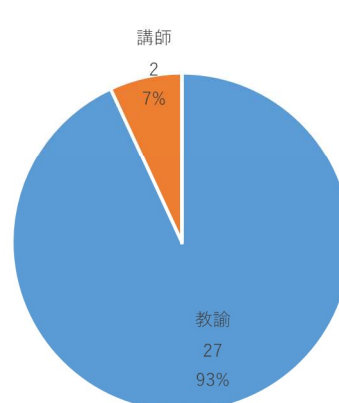
講座番号・講座名				実施日				ねらい、連絡等									
3-8-01-05 道徳教育に関する講座 ～道徳授業づくりの理論と実践～				9月18日(金) 会場 総合教育センター				道徳科の授業の意義やあり方に関する講義と、小・中学校それぞれの教材を使った模擬授業(演習)を通して、道徳授業づくり、とりわけ、その活用が求められている道徳的行為に関する体験的な学習としての役割演技の活用の仕方、発問、主題とねらい、評価等について具体的に学び、効果的な授業展開ができる授業力の向上を目指します。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 早川 裕隆 講師 上越教育大学上廣道徳教育アカデミー 特任教授 小宮 健 ・持ち物 所属する校種の学習指導要領解説 特別の教科 道徳編									
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	「教育のプロ」としての高度な知識や技能		学習指導	生徒指導	新たな教育課題		基礎形成	伸長	充実	次世代育成	希望	一 小 中 一 特 一	義務	高初	職+Ⅱ	高+Ⅱ
			⑦ ⑧ ⑨										○				○
													20名				

講師：早川 裕隆 教授(上廣道徳教育アカデミー所長) 講師：小宮 健 特任教授(上廣道徳教育アカデミー特任教授)

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「教科化で変わったこと・変わらないこと」 小宮 健 特任教授

- ・「多面的・多角的」について具体的にイメージが持てた。
- ・様々な視点から理解するということがどのようなことか、具体的に提示していただいたことで、今後道徳の授業を作っていく中で、それぞれの内容で考えていく手がかかりになると感じた。
- ・学校に復帰したところで、道徳が教科になっており、しっかり勉強する間もなく授業をしていました。教科化された理由、内容や大切なことを整理して教えていただき、とても分かりやすかったです。
- ・「考える・議論する」道徳への転換という考え方、教科の目標の考え方が分かった。
- ・道徳科の役割を弱の要に例えた部分がとても分かりやすかった。様々な道徳教育の場面に溢れる学校生活の中での「道徳科」の位置づけを理解することができた。
- ・価値を押しつけるのではなく、自分や他者にとってどのような価値があるのかを考えさせることが大切ということを再確認しました。

受講者の感想

講義「学びを深める道徳授業づくりで大切なこと」(早川 裕隆 先生)

- ・活動を通して、考えてほしい内容を決め、育てたい内容心情を考える、という流れを教えていただき、授業を考える際の指針になりそうだと感じました。
- ・生徒理解+教材理解が効果的な道徳授業につながると改めて理解できた。
- ・「考え議論する道徳」をつくるための方法を学ぶことができました。
- ・ねらいを達成することが授業では大切だと気づき、あらためて授業づくりを見直したいと思いました。
- ・ロールプレイが「訓練になっていないか」というのは、自分でも課題に感じていたことです。どのような場面で行うのが効果的なのか、どのようなフィードバックをするのかを考えていきたいです。
- ・合意解と納得解について、自分の授業を振り返りながらすごく納得し、スッキリする所があった。

受講者の感想

演習「道徳授業づくりの実際」

- ・ 授業者の受容的な言葉が様々な考えを引き出すこと、役割演技を全体を絡めて展開していくことを、授業から学ばせていただいた。
- ・ 実際に授業を受けて、自分との関りで考えたり、多面的・多角的に考えている自分に気がついた。
- ・ 解説をつけて授業の流れを見せていただきとても分かりやすかったです。子どもの側の気持ちもよくわかりました。（物語に入れば入るほど発言したくて前を向けます。）
- ・ ロールプレイを指導方法の1つとして効果的に取り入れていけるよう教材研究をしたいと感じた。
- ・ 児童の視点から教材と向き合い授業の展開について考えさせられた。
- ・ ただ上手にロールプレイするのではなく、道徳としてどのように授業を作っていくのかを見ることができました。終末のもっていき方もなるほどと思いました。
- ・ 実際の教材をもとに役割演技の授業を見させていただき、道徳の授業がおもしろいな、やってみたいなどと思った。
- ・ 発問から教材を読み取るだけでなく、様子を見取って、ターゲットを決めてロールプレイする方法が新しかった。
- ・ 受ける側になってみると、かなり頭中でいろいろな思いが揺れ動き、仲間の意見に納得したり、「ああそうか!」という発見もありました。役割演技の進め方のポイントもわかりやすかったです。練りに練った道徳をやってみたいですね。
- ・ 模擬授業を通しての演習が大変わかりやすく自分が授業を行う上での自信につながった。
- ・ 道徳の授業を子どもたちの実態をふまえた上でねらい、展開を考え、実践していきたい。
- ・ ロールプレイングの方法を具体的に教えていただいたので使ってみようと思った。使い方によっては、英語でも活かせると感じた。
- ・ 様々な先生方の意見に触れ、“見方・考え方が広がる”とはこういうことなのだと実感しました。
- ・ 初めて道徳で「発言したい」と思いました。
- ・ 日々の授業づくりでねらいを明確にした授業づくりを行い、資料の価値を理解した上で授業を行うことを大切にしたい。
- ・ 教師の子どもの見る目、発言を引き出す豊かなやりとりは、日々の授業力だと思うので、意識して取り組んでいきたいです。



講座のねらいの達成度

午前講義では、道徳科の目標は、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることであると示した上で、「考え、議論する」道徳授業の重要性について御講義いただいた。また、発達段階などを十分に踏まえ、児童生徒に望ましいと思われるわかりきったことを言わせたり書かせたりする授業という質的課題に対して、「考える道徳」「議論する道徳」であることがこれからの道徳科の象徴であることを説いた上で、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を推奨した。

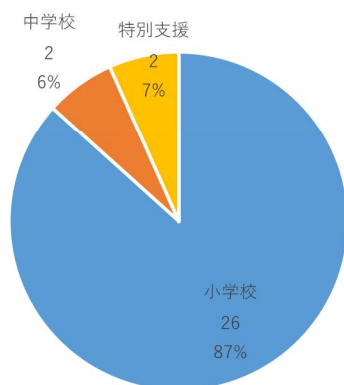
午後演習では、小宮健先生からは小学校教材「泣いた赤鬼」を題材に、早川先生からは中学校教材「偽りのバイオリン」を題材に、受講者が児童、生徒役として模擬授業（ロールプレイ）を体験した。受講者が子どもの立場に立つことで、効果的な発問、補助発問、道徳的諸価値の理解や生き方に関して児童・生徒に理解してもらおう方策を受講者自身が体験できた。一日を通して講座のねらいは十分達成できたと考える。

第5回 9月24日(木)

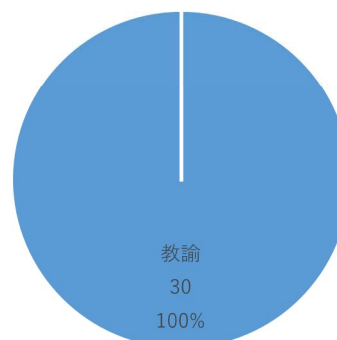
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
3-8-01-06 主体的・対話的で深い学びに関する講座 ～算数・数学と国語での「深い学び」～		9月24日(木) 会場 総合教育センター	午前講義 「国語科授業での様々な「対話的学び」の体験」 「対話的学び」と「深い学び」は密接に繋がっています。様々な対話型国語授業を作り、学びの様相の変化を検証していきます。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 片桐 史裕 午後講義 「算数・数学の本質に迫る授業づくりの理論と実践」 課題を決めるのも、解決方法や結果の妥当性を判断するのも子ども……。そんな子どもの優秀な能力を引き出す授業実践に学びます。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 岩崎 浩
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	「教育のプロ」としての高度な知識や技能	
		学習指導 生徒指導 新たな教育課題	
		⑦ ⑧ ⑨	
基礎形成	伸長	充実	次世代育成
			希望 一 小 中 高 特 一
			義務 高初 義キII 高キII
			20名
			○
			○
			・持ち物 なし

午前講師：片桐 史裕 教授 午後講師：岩崎 浩 教授

学校種



受講者の職能



受講者の感想

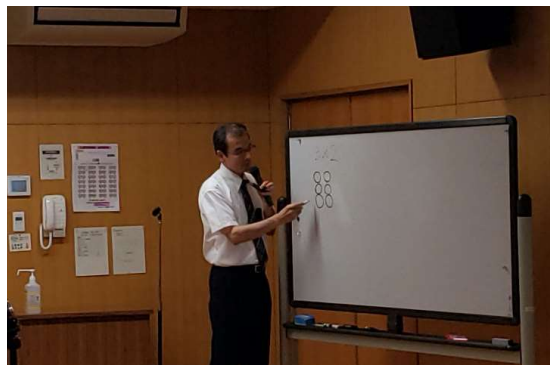
講義「国語科授業での様々な「対話的学び」の体験」 片桐 史裕 教授

- ・主体的・対話的な学びを自分が学び手となって先生方と共に考え合い、自分の見方考え方がくつがえされる実感を得られた。
- ・「自分が変わる覚悟がなければ、対話は成立しない」あらたな視点をいただいた。
- ・「唯一解」を求めるのではなく最適解を探す営みを授業で位置づけることが大きな課題であると感じました。
- ・「深い学び」の「深さ」について改めて考えられたこと、「対話」とは何か、について考えられたことが収穫の一つでした。
- ・演習を通して、また、ふりかえりシートを活用することで、「対話的な学び」を体感することができました。
- ・会話ではなく対話を目指す。今の授業は会話ばかり。改善したいです。
- ・全員が前向きに話し合うことができる「問い」が提示できるように計画したい。
- ・今回の講義や体験をもとに、目指す子どもたちの姿やつけたい力を具体的に考えながら、今後の実践を工夫していきたいと思いました。
- ・自分自身が活動を体験することで、子どもの目線になって、対話的な活動は何かを考えることができました。
- ・実際の対話的学びを体験して、経験交換が多くなされる授業をしたいと思いました。
- ・体験を通して「対話的学び」の良さや難しさを感じることができました。時間設定、問い、人数、活動内容をしっかり考えた上で、授業内容を工夫する必要があると感じました。
- ・グループの中で話し合ううちに、自分の考えが補足されたり、うまく言えなかったことが具体化したりする中で、学びが深まったように感じました。
- ・何をねらっているのか、ねらいを達成するためにどの活動が効果的なのかよく考えて仕組んでいかなければと思った。
- ・生徒同士が問いに触れながら交流することで広い視野を持ったり、新たな価値観を持つことができるであろうことを体験として知ることができた。

受講者の感想

講義「算数・数学の本質に迫る授業づくりの理論と実践」 岩崎 浩 教授

- ・子供が予想外の反応を示した時に、つい引っぱって正しい方へ誘導してしまうことがあります。講義を聴いて、子どものズレを引き出すような環境にこそ本質があり、そのためには答えを教えることは控えるという自分の課題もみえました。
- ・内容が具体的でわかりやすかった。自分がいかに教科書にとらわれ「教科書を教える」指導だったと反省した。子どもの実態をとらえ、「教科書で学べる」ような授業をつくるために教材研究や教師の役割というものを考えていきたい。
- ・デューイのシチュエーション論についてのお話は非常に興味深く拝聴させていただきました。子どもだけでなく大人も主体的に学ぼうという姿勢になるのは一方的な学びではなく、双方向性のある学びであると実感しました。
- ・自ら追究したいという気持ちを引き出せるような問いを吟味するだけでなく、問いを自ら出させる必要があるのだということがわかりました。
- ・「対戦型授業モデル」は主体的に取り組むための一つの形になり得る。小学校でも演繹的活動もチャレンジしてみたい。
- ・子どもの実態にあわせて授業は変えていく。計画通りにいかなかったらむしをチャンスとして実践していきたいです。
- ・対話的な活動をしていく上で、帰納的と演繹的な考えをこちら側が持ってやると授業の深まりにつながっていくと思うので、意識したい。
- ・実践例を聞きながら、日頃自分の授業ではどれくらい子どもたちが「分かった」「もっと追究したい」と思う授業となっているのかと考えさせられました。
- ・対戦型授業モデルを自分のクラスで実践していきたいと思いました。
- ・友達の発表に対して質問が出ない状況があるので、聞く姿勢も育てていきたい。
- ・日頃の自らの授業を思い返し、いかに自分が口をはさみすぎていたかを痛感した。ここぞというところでは「環境と向き合わせる」ことを重視し、意見交換の橋渡し役に徹するようにしたい。
- ・算数数学では知的自立性、知的有機を養うのも一つのねらいであるということが印象的だった。



講座のねらいの達成度

午前講義では、AIの技術が進歩する時代に活躍するために求められるのは、最適解と納得解を出せる人であり、最適解と納得解を出す力は「主体的・対話的で深い学び」で身に付けると説いた上で、「主体」「対話」とは何か、「深い学び」とは何かについて御講義いただいた。演習では、音読、和歌を教材にペアワークやグループワークを行うことで、国語科授業での様々な「対話的な学び」を体験することで、講義内容の理解を深めることができた。

午後講義では、図形内の一部の面積を求める問題を例示し、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業モデルとして「グループ対戦型算数授業」を紹介していただいた。対戦を通じて子ども一人一人に期待する効果、そのための仕込み、仕掛け、子どもの考えに「ズレ」が生じた後の教師の役割について御講義いただいた。

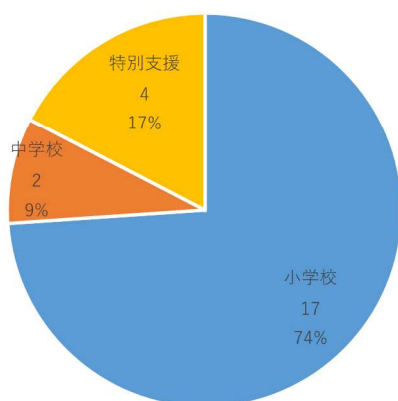
一日を通して、深い学びをデザインすること、子どもたちに有効な「問い」を与えるための教師の役割について理解が深まる講義となり、講座の目的は十分達成できたと思う。

第5回 10月20日(火)

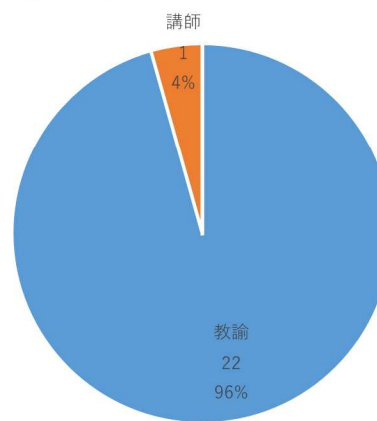
講座番号・講座名		実施日		ねらい、連絡等	
3-8-01-01 ゼロからのプログラミング教育 ～プログラミング教育の基礎と実践～		6月25日(木) 会場 総合教育センター		午前講義 「プログラミング教育って何をするの？」 知識ゼロから始める講座内容です。講義と演習を通し、小学校プログラミング教育の全体像を掴むことをねらいます。 講師 上越教育大学教職大学院 准教授 大島 崇行 午後講義 「プログラミングを体験しよう」 「iPad触ったことない」「プログラミングって何」という先生、お待たせしました。安心して「わからないなあ」と言いあいましょう。 講師 上越教育大学教職大学院 教授 桐生 徹	
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	「教育のプロ」としての高度な知識や技能			
	学習指導	生徒指導	新たな教育課題		
	⑦	⑧	⑩		
基礎形成	伸長	充実	次世代育成	希望	一 小 中 高 特 一
				○	20名
					○
					・持ち物 なし

午前講師：大島 崇行 准教授 午後講師：桐生 徹 教授

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「プログラミング教育って何をするの？」 大島 崇行 准教授

- ・プログラミング教育が入ってきたねらいやプログラミング的思考から始まり、フローチャート、マイクロビットの使い方等、実際に演習することができてよかった。
- ・アンプラグドプログラミングは、身近な活動をプログラム化して考えるので、子どもたちにもわかりやすく、興味を持ちやすいと思った。
- ・演習は大変楽しく、ぜひ子どもたちにも取り組ませたいと思うものでした。
- ・扱うことのできるような教材を見ることができて良かったです。
- ・疑問だらけだった自分でも「これなら実践できる！」というものを感じることができた。
- ・机上のパソコン、信号機、Micro:bitを見たときは不安さを感じましたが、実際に扱ってみると「楽しい」と感じました。子どもたちならなおのこと喜んで取り組むと思います。
- ・アンプラグドは機材がなくても取り組める学習なので、子どもたちと取り組んでみたいと思った。
- ・実際に自分が体験できたことで、プログラミング教育の楽しさを感じた。まず子どもも自分も慣れるために、ビジュアル・プログラミングを授業で取り入れていくことができるようにしたいと思う。
- ・アンプラグドは「手軽に」「すぐ」できるという点で、気張らずプログラミングの導入的な感じできそうだなと自分なりにイメージできました。
- ・プログラミングというとPCとソフトを使ってイメージするところを、まずはアンプラグドプログラミング（初めて知りましたが）というPCを使わないプログラミング教育の手法を教えていただけだったので、キットやソフトを使わなくてもやりようでも授業で扱えると感じました。
- ・今後の人口減少に対応して、教育が変わらなければならないことや、失敗して試行錯誤をすることが大切なことがよくわかった。
- ・授業でどのようにプログラミング教育を扱っていいかわかっていたが、身の回りの物から考えていくことを教えていただきわかりやすかった。
- ・授業実践の際、「学び合い」スタイルも組み込めることも学び、今後自分の授業の中にその要素も取り込んで授業を構想していきたいと思いました。
- ・なぜプログラミング教育！！というところがとてもわかりやすく、前向きに頑張ってみようと思えました。

受講者の感想

講義「プログラミングを体験しよう」 桐生 徹 教授

- ・主体的・対話的で深い学びのある授業実践に直につながるのがプログラミング教育である！ということを実感できる講義（体験）でした。
- ・実際の教科とプログラミング教育をどう結び付けていけばよいのかその方向性が見えてきたように感じました。
- ・ドローンを使った体験では、子どもが使えば目を輝かせて深い学びをするだろうと思うものでした。
- ・学びを生かしての体験で、より一層プログラミング教育が身近なものになった気がします。（今までゼロでしたので）。
- ・Society5.0の世界の入り口にちょっとだけですがふれられた気がしてうれしく思いました。
- ・初めてドローンに触らせていただき、貴重な経験になりました。
- ・プログラミング教育に対して抵抗感があったのですが、実際に自分が体験してみると、その必要性を感じることができました。
- ・ドローンの演習は、予算があれば総合の学習で取り入れていきたい。
- ・体育におけるプログラミングの実践など教科の理解を深めるためのものとして体験させていただきとても勉強になりました。
- ・今までアイパッドに触れたことが無く、またドローンも扱ったことが無かったのですが、そんな自分でも十分に楽しめ、きっと子どもたちはこうやって楽しみ、学習していくのだろうなとしっかり実感することができました。
- ・プログラミング学習を「主体的学び」のある授業実践を体験する場、その視点づくりととらえる見方がとても新鮮でした。
- ・様々な教育活動の中の論理的に考え実行できる場面に、プログラミング教育を取り入れることで、生徒が自分の考え方に自信を持ちよりよい考え方、アウトプットの仕方を探求しようと考えられる可能性を感じました。
- ・自分には縁の無いものだと思っていましたが、これからは教育の中にこうしたものも取り入れていかないと本当に日本は後進国になると思いました。



講座のねらいの達成度

午前講義では、2020年度から導入されたプログラミング教育のねらいについて御講義いただいた後、アンプラグドプログラミングを用いて「買い物へ行く」「信号を渡る」というお題で初歩的なプログラムの思考について学習した。後半は、スクラッチにより作成したプログラムをマイクロビットにダウンロードすることで期待どおり作動するかという体験をした。

午後講義では、主体的・対話的で深い学びのある授業実践を体験できることがプログラミング教育を学ぶねらいであること、プログラミング的思考を教科等へどうつなげるか考える視点をもつことの重要性について御講義いただいた。その後、「体育でプログラミング」と題して、立ち幅跳びを例に測量のためのプログラムを組み、マイクロビットにダウンロードして正しくプログラムされたかを体を動かしながら体験した。後半は、iPadを用いてドローンを動かすプログラムを作成し、正しく作動するか体験した。

一日を通して、主体的・対話的で深い学びを子ども目線で体験することができ、ふりかえり用紙には、プログラミング教育に対する前向きな記載されていたことから、目標は十分達成できたと考える。

○研修実施上の課題

教職大学院生が参加する対話的研修を企画したが、新型コロナウイルス感染症対策で密を避けるため、バス移動、他県との往来に制限があり、予算措置をしていた借り上げバスを全く使用できなかった。この事業計画を立てている時点で、まさかそのような事態になるとは想像だにできずにいた。今後、コロナ禍の終息がどのようになるかわからないが、効果的なオンライン研修のあり方も研究していく必要がある。

また、急遽オンライン講座に変更した講座が2つあったのだが、長野県総合教育センターの職員の方々のご尽力により、ネット接続や、センターでの対話的研修の運営など、滞りなく開催することができたのが幸いであった。

②事後のフィードバック（講座ビデオによる研修）

○研修の背景やねらい

①「対話的研修」の内容をビデオ撮影し、公開可能なほぼ全ての内容を動画配信サイト（vimeo: <https://vimeo.com/>）にアップロードすることにより、講座受講者が研修後に研修内容を復習したり、同僚等に研修内容を伝える時に閲覧したりできるようにし、研修内容の定着を図ることをねらいとする。

○対象、人数、期間、会場、日程、講師

研修項目	対象	講師	URL
1 特別支援教育に関する講座	講座参加者	西川純	https://vimeo.com/438429040/549d3a3d20
		関原真紀	https://vimeo.com/438443984/5f440bf023
2 指導力を上げる学級経営のポイント		岡田広示	https://vimeo.com/453864769/26946dafb6
		赤坂真二	https://vimeo.com/453890076/952cf96b96
3 ICT初歩の初歩講座		榊原範久	https://vimeo.com/456805744/0d9e96b829
		水落芳明	https://vimeo.com/456806428/3709904dbf
4 道徳教育に関する講座		早川裕隆	https://vimeo.com/463241071/bc634959e3
		小宮健	https://vimeo.com/463240188/fda6fa043c
5 主体的・対話的で深い学びの授業づくり		片桐史裕	https://vimeo.com/463282280/e54be11a52
		岩崎浩	https://vimeo.com/465688073/57a80fe9ce
6 ゼロからのプログラミング教育	大島崇行	https://vimeo.com/472423848/fcf8c182ec	
	桐生徹	https://vimeo.com/472440488/4421cd877e	

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）、研修の評価方法、評価結果、研修実施上の課題

昨年度に引き続き、講座をまるごと閲覧できるようにした（プライバシーや著作権保護のためにカットした部分はある。）。閲覧数はそれほどではなかったが、アーカイブとして講座を保存しておくことに意義があると考えた。

というのも、今年度初頭、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、本学教職大学院の授業を開催することができなかった。新入生は、研究室の研究内容、所属アドバイザーの授業など全くわからない状態であったが、これらの閲覧を許可し、少しでも研究に触れさせることができたのである。それだけでも意義があったと評価している。これからも、動画閲覧者数が多くなくても、アーカイブとして継続保存できるようにしたい。

③出張拡散研修

○研修の背景やねらい

長野県総合教育センター以外で行われる民間教育研修を含む全国教育研修会や学校校内研修会などに本学教員と教職大学院生が参加し、対話的研修講座で学んだ知見をもとに、研修会に参加している現職教員と対話的研修を行い、各地の現職教員にもこの研修方法を拡散し、研修会参加教職大学院生の更なる意識の向上を図ることをねらいとする。

○対象、人数、期間、会場、日程、講師

研修名 (場所)	対象	研修参加人数	期日	講師・ 助言者等	参加 大学院生等
1 学校法人文化学園長野高等学校 公開授業 (長野県 学校法人文科学園長野高等学校)	教員・ 大学院生等	9	7月28日(火)	片桐史裕	大学院生5名
2 新潟県立新潟西高等学校公開授業 (新潟県 新潟県立新潟西高等学校)		8	9月28日(月)	片桐史裕	大学院生4名
3 新潟県立羽茂高等学校職員ICT研修会 (新潟県立羽茂高等学校・オンライン研修会)		20	11月30日(月)	片桐史裕	大学院生3名
4 新潟県立久比岐高等学校授業公開・研修会		35	2月22日(月)	片桐史裕	大学院生3名

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

○研修の評価方法、評価結果

各研修の実施形態、内容、成果等を次ページ以降に示す。

1 学校法人文化学園長野高等学校公開授業

○開催日：令和2年7月28日（火）

○ねらい： 高校生のSDGsに関する取り組みを見学する

○会場： 学校法人文化学園長野高等学校

○講師、参加者名（大学側）： 片桐史裕、網代涼介、岩折匠、遠藤学、西岡省吾、西村匠

○研修内容

・日程：

8:00 上越教育大学出発

9:30 学校法人文化学園長野高等学校到着

9:50～10:30（2限）授業参観 高校生のSDGs課題研究発表

10:40～11:20（3限）研究協議会

13:00～13:40（5限）進路講座

13:50～14:30（6限）進路講座

15:00 学校法人文化学園長野高等学校出発

16:30 上越教育大学到着

・参加者数：6名

・内容の概要

SDGsに学校で取り組んでいる文化学園長野高等学校の取り組みの見学し検討する。

・現場の先生との対話的学びの内容

学校法人文化学園長野高等学校におけるSDGsの取り組みに関する発表を聞き、高校生がどのようなことに課題意識を持ち、どのような実践を行っているかを学ぶ。その後、座談会で、今後の展望や、研究の在り方について話し合う。これからの高大接続についての提案も行うことができた。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：高校生の研究では、

児童相談所や子ども食堂に実際に足を運び、1次情報にアクセスしている点は素晴らしかった。しかし、その情報を十分に活かしきれておらず、1次情報の紹介に留まってしまっている様子も見られたことから、次は社会活動を実際に興してみる、議会に提案書を提出するなどといった活動の展開が期待される。

グループ発表後の座談会では、生徒と参観者が別々に座ったためか、活発な議論は生まれなかったため、生徒の間に参観者が入る等工夫が必要であった。



2 新潟県立新潟西高等公開授業

○開催日：令和2年9月28日（月）

○ねらい：国語科における主体的・対話的で深い学びを実現するための授業実践を観察する。

○会場：新潟県立新潟西高等学校

○講師、参加者名（大学側）：片桐史裕、遠藤学、西岡省吾、岩折匠、西村匠

○研修内容

・日程：

9:00 上越教育大学出発

12:00 新潟西高等学校到着

4時間目 現代文B 授業見学

5時間目 研究協議会

15:00 新潟西高等学校出発

17:30 上越教育大学到着

・参加者数：5名

・内容の概要

遠藤周作「幼なじみたち」を読み、生徒が自ら問いを立て、グループで意見交換したりクラス全体で共有したりして問題を解決していく授業実践を見学し検討した。

・現場の先生との対話的学びの内容

普段の生徒の様子や進路に国語科がほとんど影響してこない子が一定数いるというクラスの特徴を踏まえて、教師が発問し説明する形態ではなく、生徒が問いを立て協働して探究に取り組むというスタイルを組み立てつつあるという状況であり、さらなる改善へ向けて課題の提示方法等を検討した。今回は見られなかったが、図書館を活用することも時々行っているようで、辞書や映像資料等も活用し、より深い探究へ導く方法も議論された。また、新型コロナウイルス感染症の影響で長期休校があったことで、高校生の学びに影響があったことが明らかにされ、高校の現実を知ることができた。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

高等学校においても、主体的・対話的で深い学びを実現することが大きな課題となっており、従来の授業形式からの転換が遅れているとされる国語科においては特に考えなくてはいけない問題である。今回の授業見学と研究協議会において、生徒がそれぞれの興味に合わせて主体的に文章と向き合い、対話を通して問題解決を図る授業デザインについて学ぶことができた。授業デザイン自体の課題である深い学びへの到達についても議論ができ、今後の授業についても注目していきたいとともに、自分の授業にも生かしていきたいと強く感じた。また、アクティブ・ラーニングを進めるにあたり教師はどのような役割を果たすのかについても参考になる部分があった。説明のし過ぎや解釈を示してしまうと、生徒の読みを限定してしまうことがあるが、基本的な文章の構成や設定、背景などを確認しておくことが、誤解に基づいてテキストから離れていってしまうことを防ぐために有効であることが示唆され、特に学習があまり進んでおらず基礎知識が少ない状態では気を付けるようにしたいと感じた。

ただ今回の研修では、いきなり教室に参観者が何名も訪問し、学校長や教頭先生も参観している状態であり、生徒にとっては緊張するものであったと予想される。また、参観に合わせて、授業者の先生は詰め込み過ぎたと反省を述べられており、普段の様子を映像等で参照できると見方が深まった可能性がある。

3 新潟県立羽茂高等学校 I C T職員研修会

○開催日：令和2年11月30日（月）

○ねらい：I C T導入による授業改善案を提示し、問題点を探る

○会場：新潟県立羽茂高等学校（オンライン研修会）

○講師、参加者名（大学側）：片桐史裕、遠藤学、西岡省吾

○研修内容

・日程：

15:30～16:30 授業へのI C T活用の実践例紹介・実習

・参加者数：25名

・内容の概要

Googleのオンラインサービス（Googleフォーム、Googleジャムボードなど）を使った課題作成の紹介と、体験実習。

・現場の先生との対話的学びの内容

授業に取り入れる際の問題点、注意点などの意見交換を行った。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

高等学校においても、生徒数分のiPad、無線LANが教室全てに配備されることになり、それらを効果的に授業に取り入れることは、I C Tスキルが比較的高くない高等学校教員にとって難しいことであるが、実習で実際に操作することで、そのハードルを下げることができたと考えられる。

今回は、リモート講座の手法などは示さなかったのだが、オンラインで行うことで、参加者にこのような講座も行うことができるということを示すことができ、コロナ禍での授業のあり方の選択肢も増えることを示すことができた。

4 新潟県立久比岐高等学校授業公開・研修会

○開催日：令和3年2月22日（月）

○ねらい：主体的・対話的で深い学びを実現するための授業実践を検討する。

○会場：新潟県立久比岐高等学校

○講師、参加者名（大学側）：片桐史裕、遠藤学、岩折匠、西村匠

○研修内容

・日程：

13:25～ 開会

13:30～ 1年1組 化学基礎「酸化還元反応」（杉山教諭）

1年2組 政治経済「新聞に学ぶ～コロナ禍の中で」（井上教諭）

14:40～ 2年1組 数学Ⅱ「不等式の証明」（松田教諭）

2年2組 現代文B「短歌 ただ1枚の絵葉書」（廣瀬教諭）

15:45～ 研究協議

・参加者数：20名

・内容の概要

対話的学びを目的とした授業を参観し、適切な目標と課題と評価のあり方を討議した。

・現場の先生との対話的学びの内容

授業デザインと、生徒の学びの様相について、意見交換を行った。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

高等学校では、対話的学び導入に対して、学校によっては不安感があり、教師主導の一斉指導型の授業が多くの教室で行われている。しかし、生徒が生き生きとした姿を見せる授業は、自らの考えを表出する場面であるということと、それを引き出すためには魅力的な目標と課題が必要であるということが分かった。

○研修実施上の課題

令和2年度はコロナ禍により、当初予定していた全国研修会が軒並み中止となったり、オンライン研修会へと変更になってしまい、計上していた講師料や旅費、借上げバス代などを大幅に余らせて貴機構に返金することになってしまった。

実際に対面することで、教育現場の先生の思いや熱意といったものを教職大学院生は受け取ることができるのだが、それも叶わず、昨年度に比べて、学生の学びの成果が上がらなかったと思われる。

しかし、一部をオンライン講座とすることにより、オンラインでもできる学びを検討するきっかけとなり、今後はオンライン講座でも学びの成果が上がる研修のあり方を模索していきたい。

3 連携による研修についての考察

（連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等）

長野県総合教育センターで実施した対話的研修、事後のフィードバック、全国各地に赴いて実施した出張拡散研修は全て連携している。

長野県の教育事情に基づいた課題に合わせて研修講座を実施した。その受講生のアンケートからもその満足度の高さが伺える。平成26年から7年間継続して連携を深めて研修講座を作ってきた成果だと思われる。令和3年度も研修講座を開くことが決定しており、更なる連携を強めていきたい。コロナ禍対応で急遽オンライン講座にせざるを得ないものもあったが、長野県総合教育センターの職員の方々の臨機応変な対応により、無事に講座を開催することができた。理論的な部分は、

本教職大学院教員がオンラインで担当し、対話的研修は長野県総合教育センターの職員の方が担当するというハイブリッド研修を行うことができたのが1つの成果である。

出張拡散研修では、コロナ禍で移動が制限される中、新潟県内を中心に開催できた。新潟県外では、長野市の高等学校1校のみであった。今後、研修内容により、オンラインと対面型の使い分け、またはハイブリッド型を使い分けるといことを模索する必要がある。

また、事後フィードバックにおいて、動画をアーカイブとして残しておくことの重要性も確認出来た。今後コロナ禍の状況で、どのようになるのかわからない世の中であるが、何が起こっても対応できる研修体制を準備しておく必要がある。

4 その他

[キーワード] 教員研修、対話的研修、動画配信、学級経営、ICT、プログラミング教育、道徳教育、授業づくり

[人数規模]

C. 21～50名

[研修日数(回数)]

A. 1日以内(1回)

【担当者連絡先】

●実施者 ※実施した大学、教育委員会等について記入すること

実施機関名	国立大学法人上越教育大学	
所在地	〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町1番地	
連絡担当者	所属・職名	研究連携課・スタッフ
	氏名(ふりがな)	本間 茉栄美 (ほんま まえみ)
	事務連絡等送付先	〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町1番地
	TEL/FAX	025-521-3615/025-521-3621
	E-mail	chiiki@juen.ac.jp

●連携機関 ※共同で実施した機関について記入すること

連携機関名	長野県教育委員会	
所在地	〒399-0711 長野県塩尻市大字片丘南唐沢6342-4	
連絡担当者	所属・職名	長野県総合教育センター・所長
	氏名(ふりがな)	飯島 由美 (いいじま ゆみ)
	事務連絡等送付先	〒399-0711 長野県塩尻市片丘南唐沢6342-4
	TEL/FAX	0263-53-8800
	E-mail	webmaster@edu-ctr.pref.nagano.jp